

中川奈津子¹
国立国語研究所

林由華²
神戸大学/国立民族博物館

要旨 対比主題 (contrastive topic) は焦点であるという立場と主題であるという立場がある。本論では、日本語（東京方言）における対比のハは主題であり、談話に既出という意味での旧情報とは限らないが、本論の定義するところの焦点には区分できないこと、wh 疑問文の答えに対比のハで答えた場合に含意される非網羅性はこの主題としての性質から説明できることを示す。結果として、対比のハは、主題として主題のハと同じ性質を持ちつつ、対比性の有無（あるいは強弱）においてのみ異なると捉えられると主張する。

1. はじめに

日本語（東京方言）の助詞ハには、主題のハに加え、対比のハと言われる用法がある。しばしば韻律上の卓立を伴って現れ、他の候補に対して対比的にとりたてる場合に用いる。例えば (1) では「雨」「雪」の「あ」と「き」あるいは「は」に韻律上の卓立が現れる。

(1) 雨は降っていますが、雪は降っていません。

(久野 1973b: 28, ひらがな化は引用者による。)

このように、その言語で主題としての機能や形式を持ちつつ対比性を示す形式的特徴やその含意があるような要素は、対比主題 (contrastive topic) と呼ばれる。対比主題の通言語的な研究における性格付けとして、情報構造に関係した研究の中では、この対比主題が焦点であるという立場 (Rooth, 1992; Krifka, 2008 など) とあくまで主題であるという立場 (Vallduví, 2016) がある。日本語の対比のハについても同様に、焦点であるとするもの (Kuroda, 2005; Tomioka, 2010; Oshima, 2021 など) と、主題 (旧情報) の一種であるとするもの (Makino, 1982) がある。この違いはそもそも、基本的な情報構造の概念、特に「焦点」をどう定義しているかの違いに大きく起因している (2 節および 5 節を参照)。対比主題あるいは対比のハを焦点ではなく主題とみる研究は少数派であるが、本論も、(i) 対比のハがもつ情報構造上の性質 (ii) 「対比」および「焦点」の定義・性格付けの妥当性という 2 つの観点から対比のハを主題の一種と考える。本論では主として (i) について新しい観察・指摘を行いつつ、(ii) についても言及し、対比のハは焦点でなく主題の一種として整理することが妥当であることを述べる。

まず (i) について、対比のハは、韻律的卓立を伴うという焦点と同じ形式的特徴をもつこと、また焦点であることの診断基準となる wh 疑問文の応答部分に現れることから、焦点であると考えられることがある。しかし、wh 疑問文の応答部分に現れるとはいっても、対比のハはいわゆる通常の焦点とはかなり異なる性質を持っている。(2) で例示されているように、対比のハは「非網羅性」を含意するという特徴をもつ (Kuroda, 2005 など)。本論では、この非網羅性はこれが主題であることから導ける性質であると主張する。

(2) A: 誰が大金持ちですか？

B: マイクロソフトの社長のゲイツさん {は/#が} 大金持ちです。

(Kuroda, 2005: 7, 仮名漢字化は引用者による。以下同。)

また、これを焦点と呼ぶのは、特に形式意味論の研究においてしばしば前提として採用される Rooth (1985; 1992) に見られる Alternative Semantics における焦点の定義からすれば当然のこととなる。しかし、Vallduví and Vilkkuna (1998) や Repp (2016) などでも指摘されるように、この定義自体が、情報構造上の

¹ nakagawanatuko@gmail.com

² yufaster@gmail.com

焦点と対比性を区別することができず、結果として概念の混同を起こしている。このことについて本論では、Vallduví and Vilckuna (1998) や Vallduví (2016) で示されているように、これらは焦点と対比（彼らの用語では rheme と kontrast）に区別されるべきものであり、対比のハが持つのはこのうち対比性だけであると主張する。このように整理することにより、特に日本語のような言語ではより見通しのよい記述を行うことができると考える。

以下、まず2節で、本論で重要になる概念の整理、定義を行う。続く3節で本論で扱う現象についての先行研究を示しながら、上述(ii)に関わる定義上の問題について触れる。4節では、上述した(i)に関する議論を行う。5節では、それらを踏まえて、本論における主張の背景や理論的貢献について述べる。続く6節でまとめを行う。

2. 情報構造と対比の定義

先行研究を見る前に、本節で本研究における焦点と主題の定義を確認しておく。

2.1. 焦点 (focus)

焦点とは、断定と前提の差分となるような文の要素³であり、直感的には、聞き手の知らないものごととして話し手によって提示されている文の要素である。焦点と判断する指標として、wh 疑問文の答えとなること、スムーズに訂正できることなどが挙げられることが多い。聞き手にとってニュース性のあるものとして提示されているので、これを聞いた相手が「違うよ、Yだよ」と訂正するなどして争点となりうる (Erteschik-Shir, 2007)。

2.2. 主題 (topic/background)

主題とは焦点の補集合で、文中での前提部分であり、話し手が聞き手と既に共有済みで争点とならないと想定している文の要素である (Lambrecht, 1994; Nakagawa, 2016; 2020)。この場合の主題 (topic) は、focus/background を対として考えた場合の背景情報 (background) と同じ意味で用いている。⁴ また、既に共有しているということから導ける性質として、旧情報 (hearer-old 又は discourse-old) であることが多いが、談話に既出の情報に関連するもの (inferable: Prince, 1981) もこれに含まれる (Nakagawa 2016; 2020)。この談話に既出の情報に関連するものとは、例えば「バス」に関連する「運転手」のことである。「バス」が既出の場合、「運転手」自体は既出ではないが既出として扱われ得る。

Nakagawa (2016; 2020) は、この定義の主題を標示するのが日本語東京方言のハであると主張している。

Wa codes inferable elements in addition to evoked elements. Overall, the referents of wa-coded elements are assumed to be borne in the hearer's mind at the time of utterance; alternatively, they can easily be accommodated to this assumption. (Nakagawa, 2020: 106)

(3) に示すように、ハで標示された名詞「ジョンは」は、後続の (3-B) で円滑に訂正できない。先生なのはジョンではなくてロブだということを言うだけでは不十分で、ジョンは何なのかという疑問に答えなければ十分な訂正にはならない。

(3) A: 昨日のパーティーで会った人たち覚えてる? [...] カールはうちの大学院で言語学を勉強してるんだったよね。[...] ジョンは先生だったよね。

B: ??違うよ、ロブは/が先生だよ。/ok 違うよ、ジョンはエンジニアだよ。

(op.cit.: 71, 日本語訳は引用者による)

³ “The semantic component of a pragmatically structured proposition whereby the assertion differs from the presupposition.” (Lambrecht, 1994: 213)

⁴ 「主題」のこのような用い方は必ずしも一般的というわけではないが、Nakagawa (2020) ではこの意味で「主題 (topic)」を用いている。これは Oshima (2021) でハの機能として ground と呼ばれているものに相当すると考えられる。また、林・セリック (2020) でも宮古語における日本語のハに機能的に近似した形式 (=ya) についてこれに類する意味で topic のラベルを用いているが、同じものを林 (2017) では「非焦点 (標識)」と呼んでいる。

このことを根拠に⁵ Nakagawa (2020) は、話し手が聞き手とすでに共有しており争点にならないという定義の主題がハで標示され、このことは対比のハであっても同様であると主張している (§4.2.2.2)。本研究も同様の方向性で考え、wh 疑問文の答えに現れる対比のハを焦点であると捉える枠組みよりも、主題のハも対比のハも連続的であると捉える枠組みのほうがハの特徴を連続性をもって一貫して捉えることができると主張する。

2.3. 対比 (contrast)

対比とは、1つの集合内の限定された要素どうしを比べることである。“[I]f an expression *a* is kontrastive, a membership set $M = \{\dots, a, \dots\}$ is generated and becomes available to semantic computation as some sort of quantificational domain.” (Vallduví & Vilkuna, 1998: 83) という記述が本論の定義する対比と近いと考える。また、Vallduví (2016) でも言われているように、対比性は焦点とも主題とも独立の概念であると考え (Nakagawa & Hayashi, 2022 も参照)。

3. 先行研究

本節ではまず、対比のハを主題のハとは全く異なる性質の焦点であるとみなす先行研究の主張とその根拠を概観する。その次に対比のハを主題のハと同様に旧情報を標示する標識であると主張する研究について見る。

3.1. 対比のハは焦点を標示できる

Kuroda (2005: 7-8) は (4) のように質問の答えとなれるハが存在することを根拠にハが焦点を標示し得ると主張した。また、「他にも大金持ちがいる」という暗示 (implicature) が存在することから対比のハは非網羅的リストを含意 (entail) すると述べている。

(4) A: 誰が大金持ちですか？

B: マイクロソフトの社長のゲイツさん {は/#が} 大金持ちです。

質問の答えを対比主題標識で標示すると非網羅的な答えになるという現象は、必ずしも日本語のハ固有の特徴ではなく、さまざまな言語においても報告されている (ドイツ語 (Büring, 1997) や南琉球宮古語池間西原方言⁶ (Nakagawa & Hayashi, 2022) など)。このことから、主題性と非網羅性を関連付ける動機づけがあると考えられる。

Tomioka (2010) は日本語の対比主題 (ハ) は焦点の一種であると分類した上で、‘selective binding’アプローチによって網羅的な焦点と非網羅的な対比主題は区別されるとしている。Oshima (2021) も主題のハはルート文では非焦点を表すとしつつ、韻律的卓立性のある対比のハは例外とし、焦点として扱っている点で、Tomioka, Kuroda と類似の主張であると位置づけられる。

3.2. 対比のハは旧情報を標示する

Makino (1982) は対比のハも主題のハと同様に旧情報 (anaphoric information) を表すと主張している。しかし、(4) のような先行文脈にない名詞をハで標示する例はこの主張の反例となる。筆者らは、文脈に既出の要素だけでなく既出の要素に関連する要素 (Prince (1981) のいう *inferable*) もハで標示できると考える点で Makino とは異なる。

⁵ Nakagawa はさらに、焦点のみが「へーXXなんだ」と繰り返すことができ、主題は繰り返せないという特徴を述べ、焦点と主題を区別するテストを考案しているがここでは割愛する。

⁶ 宮古池間西原方言での対比主題の形式は =*gyaa* であり、日本語のハと機能的に対応する =*ya* とは別形式である。

3.3. 残された課題

対比のハは主題のハとは異なり、焦点を標示するとする考えが、特に Rooth (1992) や Krifka (2008) の影響のある形式意味論の見方では主流である。Krifka (2008) は明確に、対比主題は主題と焦点の合わさったものであると述べている。

Contrastive topics are topics with a rising accent [...]. They [...] represent a combination of topic and focus, [...] in the following sense: They consist of an aboutness topic that contains a focus, which is doing what focus always does, namely indicating an alternative. In this case, it indicates an alternative aboutness topic. (Krifka, 2008: 267)

また、Rooth の焦点の定義も対比という概念と区別しにくい (Repp, 2016)。Rooth (1992) の alternative semantics では、焦点が以下のように定義されている。

Informally, the focus semantic value for a phrase of category S is the set of propositions obtainable from the ordinary semantic value by making a substitution in the position corresponding to the focused phrase. For instance, the focus semantic value for the sentence [_S [Mary]_F likes Sue] is the set of propositions of the form ‘x likes Sue’, while the focus semantic value for [_S Mary likes [Sue]_F] is the set of propositions of the form ‘Mary likes y’.
(Rooth, 1992: 76)

Mary likes Sue の Mary が焦点ならば「Sue のことが好きな人」の集合が作られ、Sue が焦点ならば「Mary が好きな人」の集合が作られるのである。この、集合が作られその中から 1 人選ばれる過程が対比的文脈と酷似しているため、Rooth の枠組みで考えると焦点と対比が同一視されてもおかしくはない。

対比と焦点が等価ならば、対比のハと対比のガは非網羅性以外は全く同じ機能を持つのだろうか？ また、Kuroda の指摘する対比のハの非網羅性の含意はなぜ生じるのだろうか？本研究では、対比のハは主題のハと同じように、本研究の定義する主題にしか標示できず、この主題であるという性質から対比のハの非網羅性が生じると主張する。

4. 対比のハは焦点ではなく主題である

本論では、(i) 対比のハも主題のハと同様に、話し手によって聞き手とすでに共有していると想定されているもの、すなわち談話に既出あるいはそれから連想しうるものを表す要素にしか使えないことを示す (§4.1)。(ii) そして後者の、連想しうるものを表す要素を標示する対比のハの機能が (2) のような質問の答えの場合の非網羅性を暗示することを主張する (§4.2)。(iii) さらに、wh 疑問文の答えのハも、円滑な訂正ができないことを示す (§4.3)。

4.1. 対比のハは（焦点と異なり）まっさらな新情報を標示できない

まず、主題のハと同様に対比のハであってもまっさらな新情報 (brand-new information: Prince, 1981) を標示することはできず、文脈から想起できる対象しか標示できないことを確認する (Nakagawa, 2020)。(5) の例が示すとおり、「部屋 (アパート) に付属していそうなもの」として「洗濯機」は想定内の範囲なのでハを使うことができるが、「羊」は普通日本の部屋には付属していないためハを用いると不自然になる。このように、対比のハが使える場合は既出の名詞句から連想される集合が作られその集合の中の要素を対比している。

(5) A1: 新しい部屋を探してて、昨日も 1 つ見に行ったよ

A2: 洗濯機はあったよ / A2': 羊はいたよ

(Nakagawa, 2020: 110 を改変)

同じように、典型的には焦点の出現環境である、wh 疑問文の答えに用いる対比のハも、予想外の要素を標示することはできない。例えば (6) では A の質問によって「紅白歌合戦に出ていそうな人」の集合が作られる。「小林幸子」はこの集合の要素として問題ないが、「(B の) いとこ」は通常この要素

としては期待されていない。意外性とニュース性が高すぎるので対比であってもハの使用は不自然になる。

(6) A: 誰が紅白歌合戦に出たの？

B: 小林幸子は出てたよ。/^{??}私のいところは出てたよ。

また、(5-A2)の「羊は」と同様に、「いとは」と言うとき「いところが紅白歌合戦に出ていて当然」という話し手の想定が伝わってくる。したがって、質問の答えとしての対比のハも、通常の対比のハと同様に、既出の文脈から連想される集合が想定され、その要素どうしの対比が行われていると考えられる。

4.2. 対比のハの主題的性質による非網羅性の出現

本論は、既出の情報から連想される集合が作られ、その要素の中の1つだけが対比のハによって言及されることで、質問の答えの非網羅性が生まれると主張する。例えば(6)では「小林幸子」とそれ以外の要素が「紅白に出ていそうな人」の集合に含まれ、対比のハにより「小林幸子」とそれ以外を対比することで、「紅白に出ていそうな人」の他の要素の存在が含意される。これが非網羅性の含意となる。

4.3. 対比のハは（焦点と異なり）円滑に訂正できない

例文(3)で見たように通常であれば焦点は「違うよ、Yだよ」と円滑に訂正することができるが、主題のハは訂正できない。(6B)を(7C)のように「^{??}違うよ、北島三郎 {は/が} 出てたよ」のように訂正することはかなり不自然である。最も自然な訂正は、「違うよ、小林幸子は出てなかったよ」である。これも対比のハが焦点ではなく主題の一種であることの証拠である。

(7) A: 誰が紅白歌合戦に出たの？

B: 小林幸子は出てたよ。

C: ^{??}違うよ、北島三郎 {は/が} 出てたよ。/^{ok}違うよ、小林幸子は出てなかったよ。

5. 議論

5.1. ここまでのまとめ

対比と焦点は異なる概念であることはすでに多くの研究者によって指摘されている (Lambrecht, 1994; Valduvi & Vilkuņa, 1998; Repp, 2016)。本稿では、wh 疑問文の答えのような典型的な焦点位置に現れる対比のハであっても、先行文脈によって想起された集合の要素でなければ標示しづらい、円滑に訂正できないなど、主題のハと同様の制約があり、焦点というよりも主題と位置づけたほうが良いと主張した。

以下では、本論の理論的貢献を論じたあと (§5.2)、Kuno (1972) によって指摘される主題のハと異なる対比のハの性質について議論する (§5.3-5.4)。

5.2. 本論の理論的貢献

対比のハは韻律的卓立によって主題のハと区別されるのが主流であるが、韻律的卓立性は連続的であり、対比のハと主題のハをカテゴリーカルな対立であると考えれば分類問題が生じる。本論では対比性は連続性のある概念であると考えるので問題は生じない。韻律的卓立性が高いものは対比性も高く、卓立性が低ければ対比性も低い、卓立性も対比性も中程度の例もあると予測する。

本稿の定義による焦点と主題は両立し得ない。2節の定義を素朴に解釈すると、「聞き手が知らないことで知らせる」ことが焦点で、「聞き手にとって既知である」ことが主題である。「聞き手が知らないこと」かつ「聞き手にとって既知であること」は矛盾する。

対比のハと主題のハの連続性という点でも、情報伝達の観点からの情報構造の定義の点でも、対比のハは焦点ではなく主題のハの一種であると整理するほうが理論的に簡明である。

5.3. 対比のハのみ従属節に現れることができる理由

なぜ主題のハではなく対比のハだけが従属節に現れることができるのだろうか？よく知られているように、主題のハ (Kuno (1972) の用語では *anaphoric*) は従属節に現れることができないが、対比のハは (8) のように可能である。

(8) ^{ok} 雨は降っていますが、大したことはありません。 (Kuno, 1973a: 46)

これは対比という性質から説明できる。典型的な対比の例の 1 つでは「W は X だが、Y は Z だ」のように、従属節と主文を対比させる。南琉球宮古語池間西原方言では、wh 疑問文の質問の答えに対比主題標識を用いる場合、発話が完結していないことを明示する形 (従属節にするなど) で答えないと不自然である (Nakagawa & Hayashi, 2022)。本論の対比のハの例文も言い切らないほうが自然かもしれない。例えば (4-B) の「誰が大金持ちですか？」の答えは「うーん、マイクロソフトの社長のゲイツさんは大金持ちですねー...、あとは...」と歯切れ悪く後に続きそうに答えたほうが自然に感じられる。むしろ問題は「対比でない主題のハが従属節に現れにくいのはなぜなのか」であると考えたほうが良いかもしれない。

5.4. 対比のハは「新情報」を標示できるのか

Kuno はさらに、対比のハはまっさらな新情報 (*non-anaphoric*) も標示できるとしているが、(8) の「雨」がまっさらなのかどうかは議論の余地がある。また、「大勢の人はパーティーにきましたが面白い人はいませんでした」(*op.cit.*: 47) の「大勢の人」はたしかにまっさらな新情報ではあるが、この文の容認可能性自体が疑わしい。ここでは読者の直感に頼って、一見新情報を標示しているように見えるハは先行文脈から連想できる集合の要素を標示すると主張したが、より客観的な方法で検証していきたい。

6. まとめと今後の課題

本研究では、大方の先行研究の主張とは異なり、対比のハは焦点ではなく主題のハと同様に主題を標示しており、先行文脈から想起される集合が必要であることを示した。また、この対比のハの性質により wh 疑問文の答えにハを用いたときに非網羅性が含意される効果が生まれることを主張した。本研究の枠組みは対比のハを主題のハと同様の性質を持つが対比されているかどうか異なるという特徴付けをしている点で、主題のハと全く異なるとする枠組みや対比と焦点を同一視する枠組みよりも柔軟で説明力があると考えられる。

しかし、上限を表すハの場合は本論で主張したことは当てはまらないかもしれない。(9-B) に示すように、「1000 人は」は wh 疑問文の答えになることができ、しかも (9-C) のようにこれを円滑に訂正できる。

- (9) A: 祭りに何人来たの？
B: **1000 人**はいたよ！
C: いやいや、800 人ぐらいしかいなかったよ。

ただし「1000 人は」というのは「1050 人かもしれない」「1100 人かもしれない」のような可能性を残しているという点で、非網羅性の含意はあるといえよう。これと類似と思われる現象は Hara (2006) でも指摘されている。上限のハの特徴づけに関しては、主題なのか焦点なのかを含めて今後の課題としたい。

また、主題と焦点の通言語的な形式の比較も調査していきたい。

謝辞

本研究を遂行するにあたって、長屋尚典氏、諸隈夕子氏、吉田樹生氏、大野剛氏らに有益な質問、コメントを頂いた。ここに記して感謝する。

本研究は、JSPS 科研費プロジェクト 21H00352「日琉語族の語順の変異とその相関変数の解明」(代表: 中川奈津子)、21K18376「フィールドデータのアーカイブに向けた問題点の整理と解決策」(代表: 中川奈津子)、20K20704「日琉諸語における格という文法カテゴリーの検討」(代表: 竹内史郎)、21H04351「日本語諸方言コーパスによる方言音調の比較類型論的研究」(代表: 木部暢子)、18KK0009「エチオピア諸語の記述とドキュメンテーション: ソーシャル・イノベーションにむけて」(代表: 乾秀行)、19H05354「日琉諸語の歴史と発展についての総合的研究に向けて」(代表: 林由華)、22K13126「琉球諸語における動詞形態論のバリエーションと歴史変遷」(代表: 林由華)の助成を受けたものである。

参考文献

- Büring, Daniel (1997) The great scope inversion conspiracy, *Linguistics and Philosophy* 20: 175–194.
- Erteschik-Shir, Nomi (2007) *Information structure: the syntax-discourse interface*. Oxford: Oxford University Press.
- Hara, Yurie (2006) Implicature unsuspendable: Japanese Contrastive *wa*. *Proceedings of Texas Linguistics Society* 8: 35–45.
- 林由華 (2017) 「南琉球宮古語池間西原方言における *du* 焦点構文と述語焦点形」, 『阪大社会言語学研究ノート』 15: 87–99.
- 林由華・ケナン=セリック (2020) 南琉球宮古諸方言における接続形終止用法の機能, 『方言の研究』 6: 59–84.
- Kuno, Susumu (1973a) *The structure of the Japanese language*, MIT Press.
- 久野暲 (1973b) 『日本文法研究』, 大修館書店.
- Kuroda, Shige-Yuki (2005) Focusing on the matter of topic: a study of *wa* and *ga* in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 14: 1–58.
- Lambrecht, Knud (1994) *Information structure and sentence form*. Cambridge University Press.
- Makino, Seiichi (1982) Japanese grammar and functional grammar, *Lingua*, 57, 125–173.
- Nakagawa, Natsuko (2016) *Information structure in spoken Japanese: Particles, word order, and intonation*. PhD Dissertation, Kyoto University.
- Nakagawa, Natsuko (2020) *Information structure in spoken Japanese: Particles, word order, and intonation*. Language Science Press.
- Nakagawa, Natsuko & Hayashi, Yuka (2022) Contrastive topic =*gyaa* in Ikema-Nishihara Miyakoan of Southern Ryukyus. *Japanese/Korean Linguistics* 29: 403–412.
- Oshima, David Y. (2021) When (not) to use the Japanese particle *wa*: Groundhood, contrastive topics, and grammatical functions. *Language* 97(4): e320–e340.
- Prince, Ellen (1981) Toward a taxonomy of given-new information, In Cole, Peter (Ed.) *Radical Pragmatics*, Academic Press.
- Repp, Sophie (2016) Contrast: Dissecting an elusive information-structural notion and its role in grammar. In Caroline Féry & Shinichiro Ishihara (eds.), *Handbook of Information Structure*, 270–289. Oxford University Press.
- Rooth, Mats (1985) *Association with focus*, A PhD dissertation, University of Massachusetts.
- Rooth, Mats (1992) A theory of focus interpretation, *Natural Language Semantics* 1(1), 75–116.
- Tomioka, Satoshi (2010) A scope theory of contrastive topics, *Iberia* 2.1: 113–130.
- Vallduví, Enric & Vilkuna, Maria (1998). On rheme and kontrast. In P. W. Culicover & L. McNally (Eds.), *The Limits of Syntax*, 79–108. Academic Press.
- Vallduví, Enric (2016) Information structure, In Aloni, Maria & Dekker, Paul (Eds.), *The Cambridge Handbook of Formal Semantics*, 728–755, Cambridge University Press.